

氏名(本籍地)	三澤 祐 嗣 (神奈川県)		
学位の種類	博士 (文学)		
報告・学位記番号	甲第375号 (甲文第44号)		
学位記授与の日付	平成27年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	インド思想における世界構成原理の研究 ーサーンキヤ思想を中心としてー		
論文審査委員	主査 教授	Ph.D.	宮 本 久 義
	副査 教授	博士 (文学)	橋 本 泰 元
	副査 教授	博士 (文学)	山 口 し の ぶ

#### 【論文審査】

三澤祐嗣氏の研究課題は、古代インドにおいて世界を概念的な認識手段で把握しようとした思想家たちが、どのような概念を用いていたのか、またそれらの概念は思想的発展とともにどのような変遷をとげたのかの解明である。古代インドには多くの学派や思想潮流があったが、三澤氏はそれらの中でも最重要な流れの一つであるサーンキヤ思想を取り上げた。サーンキヤ思想は、4世紀頃に編纂された根本教典 *Sāṃkhya-kārikā* (『サーンキヤ・カーリカー』) により、学派としての体系化された思想が構築され、いわゆる六派哲学の一派「サーンキヤ学派」として認識されるようになった。サーンキヤ学派の教説は、純粹精神 (*puruṣa*) と根本原質 (*prakṛti*) という二元論の立場をとる無神論的傾向のものであるが、学派として体系化される以前の段階には多くの異なる説が存在した。それらは総称して初期サーンキヤ思想と呼ばれるが、その中でも叙事詩 *Mahābhārata* (『マハーバーラタ』) に多く説かれるサーンキヤ説はエピック・サーンキヤと呼ばれる。またアーユルヴェーダの医典 *Carakasamhitā* (『チャラカ本集』) やダルマ文献 *Manusmṛti* (『マヌ法典』)、仏教文学 *Buddhacarita* (『仏所行讃』) においてもサーンキヤ説が散見される。またそれらとは別に、ヒンドゥー教の神話や聖地の縁起を記すプラナーナ聖典群や、さらにはパーンチャラートラ派やカシュミール・シヴァ派などのヒンドゥー教タントラ聖典にもサーンキヤ思想の諸々の概念を使った世界観が継承されている。三澤氏は、このようにインド人の思考法のバックボーンの一つとして大きな影響を与えたサーンキヤ思想の世界構成原理を、サーンキヤ学派の隆盛したグプタ朝期 (4～6世紀) を中心に、その前からの流れと後代への影響をも一部含めるといふ大きなパースペクティブのもとに解明を試みた。

本論文全体の構成は以下の通りである。

## 序 論

第1章 ヴェーダ聖典およびウパニシャッド文献における世界構成原理

第2章 *Mahābhārata* における世界構成原理第3章 *Manusmṛti* における世界構成原理第4章 *Carakasamhitā* および *Buddhacarita* における世界構成原理

第5章 古典サーンキヤにおける世界構成原理

第6章 パーンチャラートラ派における世界構成原理

第7章 結論

補 遺：訳註

論文の概要は、以下の通りである。

「序論」の第1節では、本論文で扱うサーンキヤ思想の史的展開を概観し、第2～4節で、それぞれエピック・サーンキヤ、古典サーンキヤ(サーンキヤ学派の思想)、パーンチャラートラ派の主要な教典とそれらの内容を、最新の研究に基づいてまとめている。

第1章「ヴェーダ聖典およびウパニシャッド文献における世界構成原理」では、サーンキヤ思想の萌芽をインド最古の文献であるヴェーダ聖典やそれに続くウパニシャッド聖典に求め、第1節では、ヴェーダ聖典、第2節ではウパニシャッド聖典において、サーンキヤ思想と関係のある箇所を取り上げて検証している。ヴェーダ聖典には、直接サーンキヤ学派の説に繋がる教説はないが、後のサーンキヤ説に見られる重要な述語が登場するので、それらを取り上げて検討している。同様に、初期散文ウパニシャッド、中期韻文ウパニシャッド、後期散文ウパニシャッドの聖典群において、サーンキヤ思想に関連があると考えられる箇所を取り上げ、サーンキヤ思想に繋がる要素を確認している。

第2章「*Mahābhārata* における世界構成原理」は、本論文の中核をなす部分で、エピック・サーンキヤの中心をなす『マハーバーラタ』における世界構成原理についての考察を行っている。『マハーバーラタ』第12巻に収められている「モークシャダルマ篇」(Mokṣadharmā-Parvan) に見られるサーンキヤ思想は、従来研究者の間で様々な解釈が試みられているが、テキストの不備という問題もあり、整合性のある解釈はなされていなかった。三澤氏は、サーンキヤ思想について説かれた箇所を抽出し、以下のように解釈、あるいはほぼ納得のいく仮説を含む解釈を提示した。

最初の第1節では、「モークシャダルマ篇」におけるサーンキヤ思想の最も基本的なテキストと考えられてきた第187章と第239-241章(同一テキストの別バージョンと考えられている)を取り上げ、先行研究に依りつつ、世界の構成原理と心的属性について検証し、ウパニシャッド的な要素が強いという結論に至っている。次の第2節では、第203章における8種の根本原因と16種の変異の説について検証した。列挙されている原理は

『サーンキヤ・カーリカー』に非常に類似したものであるが、展開の順序やその数などが異なることを指摘している。第3節では、第291章における25原理説を取り上げている。ここでは、8種の根本原因と16種の変異の説に基づきつつも、25番目の原理としてヴィシュヌ神が挙げられている。三澤氏は、この部分はヴィシュヌ神から世界が顕現するという独自の理論を展開するものと結論付けている。第4節では、第298章で説かれた24の原理の説と9の創造という2つの創造説が並列された箇所について検証している。ここでは、まったく違う説が併記されており、異なるグループの説を誤って記載してしまった可能性が高いと指摘している。さらに第5節では、「ナーラーヤニーヤ章」(Nārāyaṇīya-Parvan)というパーンチャラートラ派の教義が説かれた箇所の中で、8つの根本原理をあげる第327章と、ヴェーハ説が説かれる第326章を取り上げて世界の構成原理を検証している。第327章には8種の根本原因が説かれるが、16種の変異はなく、複雑な神話的要素が入り混じっている。第326章の説では、ヴェーハと呼ばれるパーンチャラートラ派の創造説の中で最も特徴的なものである4神の顕現と構成原理展開が対応している箇所について論じている。これらの箇所は、矛盾点を含み、様々な理論を整理せずに取り入れてしまった箇所であると結論付けている。この章の最後の第6節では、『マハーバーラタ』第6巻に収められている『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavadgītā)における世界構成原理も取り上げている。サーンキヤ思想に直接関連した創造説の記述は少ないが、特徴的な思想が見られると結論付けている。

第3章「Manusmṛtiにおける世界構成原理」では、『マヌ法典』が『マハーバーラタ』に類似するサーンキヤ説を説いていることを指摘している。この説は自己の主体であるアートマンが動作因と質量因という2つの側面を併せ持つもの、すなわち一元論的な説で、サーンキヤ学派の二元論とは相違すると指摘している。また、輪廻に関する分類を3種のグナにより規定する説にサーンキヤ思想が関連し、その相違点を解明している。

第4章「CarakasamhitāおよびBuddhacaritaにおける世界構成原理」では、アールヴェーダの根本教典の一つである『チャラカ・サンヒター』と仏教文学の嚆矢『ブッダ・チャリタ』において、エピック・サーンキヤの最も典型的な説と考えられる8種の根本原因と16種の変異の説が説かれていることを確認し、サーンキヤ的な思想がかなり異なる分野にも広がっていたことを検証している。

第5章「古典サーンキヤにおける世界構成原理」では、『サーンキヤ・カーリカー』に説かれる25原理の開展説を取り上げている。特に3種のグナの構成要素的機能と属性的機能について、『サーンキヤ・カーリカー』の主要な注釈書を用いて分析している。

第6章「パーンチャラートラ派における世界構成原理」では、同派の根本教典『アヒルブドニヤ・サンヒター』(Aḥirbudhnyasamhitā)と『ラクシュミー・タントラ』(Lakṣmītantra)を用いて宇宙論についての考察を行っている。『アヒルブドニヤ・サンヒター』において

は一見すると古典サーンキヤの理論が用いられているが、詳細に分析すると、むしろ、ウパニシャッド文献や『マハーバーラタ』理論が再解釈されて取り入れられていることを明らかにした。次に、『ラクシュミー・タントラ』における最高神の顕現を扱い、ヴェーハ説の複雑な展開の中に見られる、最高神の顕現について解明した。

以上を踏まえた第7章の結論では、自己と宇宙の関係というウパニシャッド以来の問題が、サーンキヤ思想のもとで徐々に重視されるようになり、自己の心的現象（こころの在り方）の下に現象世界の創造をおく宇宙論を構築したとする。エピック・サーンキヤにおいてはその変遷過程が示されているので、整合性のない様々な説が登場したのであるという。しかし、サーンキヤ学派の成立とともに形而上学的な宇宙論が形成されると、後のヒンドゥー・タントラの時代ではそれに対抗するように、精神と物質の関係が乖離していく傾向を示す。純粋な精神を最高原理においた場合、その純粋精神から直接に苦である現象世界が生じるのは不都合が生じる。さらに、時代が下るにつれ精神の純粋性がことさらに強調されていくなかで、その純粋性を明瞭に示すために、精神と物質の関係がさらに離されていくことになったからであろうと考察している。

論文末には「補遺」として、*Mahābhārata*, Mokṣadharmā-Parvan 第187章、第203章、第239章、第240章、第241章、第291章、第298章の訳註、*Sāṃkhyakārikā* の第11–16、22–26偈に対する注釈、*Sāṃkhyatattvakaumudī* の訳註、さらにタントラ文献である、*Ahīrbudhnyasaṃhitā* 第7章と *Lakṣmītantra* 第1–3章の訳註が付されているので、研究者にとって本論文の論述を検証する際の基礎資料となるとともに、さらなる研究の便宜を提供するものとなっている。

### 【審査結果】

本論文は、サーンキヤ学派の根本教典『サーンキヤ・カーリカー』の思想の前段階を示す『マハーバーラタ』のサーンキヤ説と、サーンキヤ学派成立後に展開したパーンチャラートラ派に見られるサーンキヤ説に焦点を当て、それらの世界構成原理の解明を試みたものである。『マハーバーラタ』における世界構成原理の研究は、クリティカル・エディションにおいても多くの不備が見られ、たいへん難解な部分であるが、三澤氏は註釈書や、ほぼ同時期の典籍『マヌ法典』、『チャラカ・サンヒター』、『ブッダ・チャリタ』などとの比較を行い、かなり整合性のある解釈を示すことができた。また、パーンチャラートラ派の『アヒルブドニヤ・サンヒター』と『ラクシュミー・タントラ』の宇宙論の考察では、従来研究者に指摘されているサーンキヤ説が、サーンキヤ学派の直接的影響を受けたサーンキヤ思想ではなく、むしろウパニシャッド文献や『マハーバーラタ』理論が再解釈されて取り入れられていることを明らかにした。また付言すると、『アヒルブドニヤ・サンヒター』と『ラクシュミー・タントラ』両書の、一部ではあるが、まとまった形での日本語訳は本

論文におけるものが初めてである。

以上見てきたように、三澤氏の論文はサーンキヤ思想の史的展開の研究を大きく前進させるものと高く評価できる。また、文学研究科（仏教学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。従って、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもって三澤祐嗣氏の博士学位請求論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断する。